

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』 卷子装袖珍写本

——近世愛蔵の拡がり——

中 前 正 志

一 伝藤田友閑筆写本から藤田友閑真筆本へ

京都女子大学図書館が所蔵する『方丈記』の写本・版本計二十三点のうち、昨年一月発行の『女子大国文』第百六十八号においては、伝藤田友閑筆写本を取り上げた（梶山袖輝との共著「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝藤田友閑筆写本——松花堂にあった不純本文の片鱗——」。以下、「前稿」）。同本が益田鈍翁（一八四八〜一九三八）の旧蔵書であったことを確認し、次に、「白亭」すなわち神立愚鈍による奥書の記述をめぐって考察するなかで、松花堂昭乗高弟の能筆家・友閑の真筆本である可能性を探った。瀧本流の門弟で、瀧本流手本の編纂も手掛けていて、友閑の筆跡を熟知していたであろう愚鈍が、「ます女」に求められて友閑筆と鑑定しているのだから、伝藤田友閑筆写本が友閑の真筆本である可能性が相当に高いと考えられた。しかし、友閑の筆跡に何ら通じていない稿者らには、愚鈍の鑑定結果が真に正しいものであるのか否か、判断することができず、前稿ではその点、保留しておいた。

61 それで、後日、八幡市立松花堂庭園・松花堂美術館の川畑薫氏に写真をご覧頂くこととし、結果、「松花堂流の書き

手の書風として違和感なく、「仮名に顕著な右肩上がりの切れのある字姿と、仮名に比して、丸みのあるやわらかな漢字のバランスは、友閑の書の雰囲気に通じるものと思われ」、「友閑の筆跡として、あり得るものと見られる」というご教示を頂戴した。愚鈍のうえに川畑氏の鑑定が加わって、友閑の真筆である可能性がますます高まった。「伝藤田友閑筆写本」と称してきた当該写本を最早、「藤田友閑真筆本」と認定していいのではないか。

友閑真筆であれば、前稿にも述べたことだが、「翁の門人おほしといへども、よく其右に出るものなし」（『松花堂筆跡法帖』從元祖至九代、小松茂美『日本書流全史』二所引）などとされる藤田友閑の、まとまった真筆作品として、当該写本は、日本書道史上の小さからぬ意義を帯びることになる。また、友閑真筆が確定することに伴って、当該写本の成立時期も十七世紀半ば前後と確定する。

前稿に示した通り、流布本系統に属する当該写本は、鈴木知太郎「方丈記諸本解説」（『方丈記』武蔵野書院、昭34）が、「系統中においては、他のいずれの諸本とも多量の差異を存している」ということから、それ一本だけを独立させて「第三類本」とした、古本系統の学習院大学本と、特異な本文をかなりの程度共有している。その学習院大学本は、「まず江戸中期をさかのぼるものではあるまい」（前出鈴木解説）「江戸後期写」（神田邦彦「先行研究に見る『方丈記』の諸本とその影印・翻刻・解題一覧（稿）」『鴨長明とその時代「方丈記」800年記念』国文学研究資料館、平24）とされるが、それよりも相当に遡る、当該写本成立時期の十七世紀半ば前後には確実に、学習院大学本に見られる特異な本文のうちかなりの部分が発生していたことになる。学習院大学本について「もと古本系統から出たものではあるが、伝来の途次において、あるいは誤写、意改、または他本による校合本文、ないしは傍注の混入などによって、諸種の要素を含むに至り、次第に本文の不純化を招いて、ついに今日に見るような文章を形成するにたち至ったものと考えられる」（前出鈴木解説）とされるような、特異な本文へと至る不純化の現象は、随分と以前から始まっていたことにもな

ろう。あるいは、中世にまで遡るかもしれない。伝藤田友閑筆写本が友閑真筆本であって、十七世紀半ば前後の書写であることが確定すれば、そんな想像さえ生じ得るだろう。

二 益田鈍翁旧蔵卷子装袖珍写本

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』写本のうちには、右の藤田友閑真筆本以外にもう一点、益田鈍翁旧蔵書と覚しきものが存する。卷子装袖珍写本一軸である（請求記号 KN91442/Ka41 資料ID 0002702355）。「加茂長明／方丈記（小長巻）／益田鈍翁旧ゾ書」とペン書した紙片を伴っている。小さな桐箱に納められていて、箱書「加茂長明方丈記」（墨書）。また、その側面にも「鴨長明小巻物」、蓋裏にも「庚申春／詠」の墨書が見える。同写本が鈍翁の手許にあった際に、この小箱が詠えられたのだとすれば、それは、「庚申」年すなわち大正九年（一九二〇）の春のことであったと知れる。その前年の大正八年九月四日には、前稿に見た通り、鈍翁は、強羅の茶室「方丈庵」にて、高橋義雄らを招き茶会を催して、高橋『萬象録』大正八年九月六日条に拠るに、先の藤田友閑真筆本を文机の上に飾っていた。

鈍翁旧蔵書らしきこの卷子装袖珍写本については、昭和六十年発行の学内誌『京都女子大学通信』第二十三号に、浜千代清氏による紹介文「方丈記 懐中卷子本」が掲載されている。左に全文を掲げる。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」で始まる鴨長明の『方丈記』は、今も広く愛読されていますが、その淵源は嵯峨本『方丈記』にあるようです。嵯峨本とは、江戸時代初期に本阿弥光悦らが嵯峨で出版した一群の書物の称で、美術的価値の高い豪華版でした。したがってまだ一般的ではなかったのですが、約半世紀後にこの本文に基づいた正保版本が出るに及んで、急速に流布するようになります。

この流布本の特徴の一つは、本文の後に「月かげは」の歌があることです。これは長明と同時代の歌人源季広の

作で、後人の添えたものですが、本書も掲載写真に見る通りです。しかし本文は嵯峨本や正保本とやや異なるところがあり、また江戸初期の写と見られる点から、流布本系統の一本となりましょう。

本書は紙高8・3センチ、長さ10メートル15・5センチ、軸に水晶を用いた卷子本で、表紙は紺紙に金泥で水辺が描かれています。右側のカットはその実物大です。ちょうど手のひらに入る大きさです。ということは、『方丈記』を愛する人が、特別に注文して作らせ、いつも懐中にしながら折にふれて読んだのではないかと思われるのです。

こうした愛蔵版は他に類がないといえましょう。

「掲載写真」は、先の学内誌の表紙に掲げられた、巻首と巻尾の写真計二葉。「右側のカット」は、外観の写真。「江戸初期の写と見られる」とあるが、もう少し下るのではと思ひ、拙編『東山中世文学論纂』（私家版、平26）所載「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝本略目録稿」では「江戸中期写」としておいた。ただ、確信は持てない。一行に約八文字（最少五文字、最多十二文字）ずつ、計九八四行に本文を書写しており、「月かげは」歌も四行に記す。結果、僅かに「紙高8・3センチ」の卷子本という、「いつも懐中にしながら折にふれて読んだのではないかと思われる」「愛蔵版」となっている。また、上掲「略目録稿」に記載の通り、「楮紙。外題・内題なし。漢字交り平仮名文」。

なお、右の卷子装袖珍写本は、稿者が担当した平成二十四年度京都女子大学図書館所蔵図書資料展観「方丈記八百年記念 長明と清盛 ―ゆく川、海へ―」（於京都女子学園建学記念館「錦華殿」）にて展示し、その図録に全体の影印と翻刻を掲載した。ただ、一部に誤読などを含んでいるので、改めて翻刻のみ小稿末に掲げておく。

三 正保本との距離

右の浜千代紹介文が、卷子装袖珍写本は「流布本系統の一本」で、「嵯峨本や正保本とやや異なるところがあり」

と記す点を確認するため、正保版本との校異を、句読点・振り仮名・濁点の有無、漢字の宛て方や仮名遣い・送り仮名の相違、および漢字と仮名の相違を基本的には除いて、以下に列記する。行番号とともに卷子装袖珍写本の本文を掲げ、その下の括弧内に対応する正保版本の本文を載せた。波線部は、卷子装袖珍写本にあって正保版本にない本文。実線部は、正保版本にあって卷子装袖珍写本にない本文。二重実線部は、両本の間で相違する本文。行番号を□で囲んだ本文は、正保版本だけでなく、青木伝子偏『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）が取り上げる、同版本以外の広本系の伝本計十六本のいずれにも共通する本文が見られないものである。十六伝本のうちいずれかに見られる本文である場合は、同伝本の漢字一字の略称（右青木編書に拠る）を、「大現／兼近」「親現叡氏名／○」などと示した。ㄥ

- ㄥわつか（わつかに） 51はては（はてには） ㄥ親現叡氏名／○ ㄥ三町（一二町） ㄥ76あるは（あるひは） ㄥ89
 ㄥわつか（類ひ） ㄥ148比には（比にはかに） ㄥ153さたまりにけるより（さだまりにけるより後） ㄥ161されともかくい
 ふ（されどとかくいふ） ㄥ親現叡氏名／○ ㄥ165移り給ひ世に（移り給ひぬ世に） ㄥ170一日もとく（一日なりともと
 く） ㄥ182あへたまりて（あらたまりて） ㄥ183馬鞍をのみ（た、馬鞍をのみ） ㄥ習／○ ㄥ210造る屋（造れる屋） ㄥ229瑞
 相かと聞ける（瑞相とか聞ける） ㄥ〇／嵯京 ㄥ239なりける（なりにける） ㄥ習／○ ㄥ239けるか（けるにか）
 ㄥ279京のならひもとは（京のならひなにはにつけてもみなもとは） ㄥ292愁悲しむ（愁へ悲しふ） ㄥ大前山西親現叡氏
 名龍習／兼近 ㄥ312ついち（ついひぢ） ㄥ前西親現龍／兼近 ㄥ319有ま（有さま） ㄥ337所々につき（所々につきて）
 ㄥ340すへき方なきもの（すべき方なきもの） ㄥ大叡氏名習／○ ㄥ353次にして（次になして） ㄥ大前山西親現叡氏名
 龍習／○ ㄥ425雲にものほらん（雲にのほらん） ㄥ大前山西親現叡氏名龍／○ ㄥ433ついち（ついひち） ㄥ〇／兼近
 ㄥ462日ませ（一日ませ） ㄥ前西親龍習／○ ㄥ482後には（後は） ㄥ486我身と栖とはかなく（我身と栖とはかなく） ㄥ

山現習／○ 496 よろこぶ（ふかくよろこぶ） 506 まつしくて（まつしくして） 〓山親現／○ 509 朝夕に（朝夕）

529 宝あれは歎切也（宝あれはおそれ多く貧しければ歎切也） 535 くるし（身くるし） 553 なすらふる（なすらふるに）

597 百分か一（又百分か一） 〓山親現／○ 626 あみた画像（阿弥陀の画像） 633 障子（北の障子） 683 念仏ものうく（若念仏ものうく）

699 朝には満沙弥か風情をぬすみ（朝には岡の屋に行かふ船をなかれて満沙弥か風情をぬすみ）

741 心をなくさむるさはりなし（こころを慰むるに障なし） 758 且は家つとにす（且は仏に奉り且は家づとにす）

810 一身のやとす（一身をやとす） 〓現／○ 815 人をおさるゝによりて也（則人をおさるゝによりて也） 822 たのしみ（樂ひ） 〓大前親現取／兼近 828 親昵朋友に作る（親昵朋友のために作る） 836 此身もなく（此身のあり様ともなふへき人もなく） 846 情あると直なるとは愛せず（情有と直なるとをを愛せず） 〓龍／○ 860 たゆからずしもあらす（たゆからずしもあらねど） 876 つかふとても心をうこかす事なし（つかふとてもたひく過さずものうしと

ても心をうこかす事なし） 〓現／○ 880 養生なるへし（是養生成べし） 〓大現／兼近 888 うるにしたかひ（うるにしたがひて） 942 余算の山の端にちかし（余算山の端に近し） 〓大現／○

浜千代紹介文が「やや異なるところがあり」とするように、卷子装袖珍写本と正保版本との間に種々相違は認められるものの、数量的に限られていて、決して目立って見られるわけではない。そんななか、279 529 699 758 836 876 行の計六事例がいくらか目に付きはするけれども、例えばそのうち 836 行の場合など、「此身もなく」では前後の文脈の中で全く意味をなさないのであって、正保版本の本文（右引実線部）あるいはそれに相当する本文を、誤って脱落させたものに違っているまい。他の五例も同様であろう。ただ、876 行の事例は、日現本にも同じ形で見られるので、すでに誤られた同本系統の本文を受け継いだのかもしれない。六事例いずれも、卷子装袖珍写本段階のものなのか、それ以前の段階のものなのかはともかく、単純な誤写によって生じたと覚しい相違であって、本質的に大きな意味を持つ相違とは言い難い。

右の六例以外の相違はすべて、僅か一文字か二文字あるいは三文字の本文が、一方にあって他方にないか、両本間で食い違っているかに過ぎない。また、それらのうち、一見すると意味的にかなりの差を生んでいるように思われる、161「されとも、かくいふ（されど、とかくいふ）」といった場合も、「も」と「と」の草体が近似するところから生じた、これまた単純な誤写によるものに違いない。ただ、その161行の本文「されともかくいふ」は、右校異に示した通り、正保版本だけでなく流布本系諸本には見られず、古本系の正親町家旧蔵本・日現本・保寂本・氏孝本・名古屋図書館本に認められるものであるし、そういう状況は51行の「はては」でも全く同じである。また、353行の事例は、青木編書の取り上げる古本系諸本が全て「次にして」、他方の流布本系諸本が全て「次になして」であって、両系統間の対立が顕著なものだが、卷子装袖珍写本は、古本系の本文を載せている。425行の事例についても、ほぼ同様である。その他にも、右校異に挙げたように、正保版本とは異なり古本系の諸本と共通する本文が、散見される。「流布本系統の一本」（浜千代紹介文）に違いはないが、古本系の本文がそのようにいくらか混在している点には、注意しておいてよからう。

また、青木編書が取り上げる、正保版本も含む広本系計十七本のうち、正保版本と、「本文は正保版本と全く同じである」（青木編書）天理図書館本、そして嵯峨本の、計三本にのみ共通する本文が、卷子装袖珍写本にも、919「牛馬」（他諸本は「象馬」）など見られる。さらに、正保版本と嵯峨本との間にも小異のあることが知られているが、それら小異箇所を卷子装袖珍写本について確認するに、右校異に挙げたうち229「瑞相かと聞をける」が、正保版本でなく嵯峨本の方と一致する以外は、すべて正保版本と一致している。374「縁を」（嵯峨本「縁に」、753「帰るさ」（嵯峨本「帰るさま」）、684「まめならさる」（嵯峨本など他諸本全て「まめならぬ」）、819「ましらはす」（同上「ましらす」）、940「さとさん」（同上「さとらん」、など）。

以上を総合するに、単純な誤写による異文などだけでなく、微細なものながら古本系の本文が入り込んでいる面も見

受けられるのであって、卷子装袖珍写本は、正保版本と直接関係する、その忠実あるいは杜撰な写しというわけでは決してない。ただ、正保版本とかなり近い距離にあることは確かかなようである。

四 近世愛蔵の拡がり

右の校異において、正保版本にあつて卷子装袖珍写本にない本文（実線部）は、先述通り、一文字あるいは二、三文字のものがほとんどであるが、それを超える文字数に及ぶものも六例見られた。それらを改めて次に掲出する。

279 京のならひもとは（京のならひなにはにつけてもみなもとは）

529 宝あれは歎切也（宝あれはおそれ多く貧しければ歎切也）

699 朝には満沙弥か風情をぬすみ（朝には岡の屋に行かふ船をなかめて満沙弥か風情をぬすみ）

758 且は家つとにす（且は仏に奉り且は家づとにす）

836 此身もなく（此身のあり様ともなふへき人もなく）

876 つかふとても心をうこかす事なし（つかふとてもたひく過さずものうしとても心をうこかす事なし）

これら六例いづれも、誤写によって実線部を脱落させた本文を、卷子装袖珍写本が載せているものと推測されたが、その実線部の文字数が順に十・十・十三・六・十一・十四文字と、758行の事例が六文字であるのをやや例外的なものとして、十文字もしくは十数文字でほぼ一定している。卷子装袖珍写本が実線部を欠いているのは、毎行およそ十〜十数文字前後の字詰めで書写された本文を親本として書写した際に、目移りを起こしてほぼ一行分を脱落させた結果である可能性が考えられるところであろう。仮にそうだとすれば、卷子装袖珍写本が一行約八文字の字詰めで書写されていること、先に述べた通りだが、その親本も、それに近い形の字詰めで書写された、同写本と同様の袖珍本であったものかと想定

されよう。または、卷子装袖珍写本自身が目移りを起こしたのではなく、その親本、あるいはさらにその先の親本の段階で、同様の袖珍本によって目移りを起こしていたとも考え得る。

先引浜千代紹介文は「こうした愛蔵版は他に類がないといえましよう」と結ぶが、確かに、現伝本の中に同様の袖珍本、愛蔵版があるのを聞かない。先出神田邦彦「一覽(稿)」にも登載されていない。しかし、右に可能性として想定したことが現実のものであったとすれば、卷子装袖珍写本は当時、決して孤立した存在でなかったことになる。同様の愛蔵版が、同様にして『方丈記』を愛蔵する状況が、かなり拡がっていたことをも想像させるところがある。今回取り上げた小さな卷子本は、その向こうに、近世における『方丈記』愛蔵の拡がりを透かし見ることができ、そういう可能性をも有しているのである。529「——れは——れは」758「且は——且は——」876「——とても——とても」という形になっている事例などは特に、親本の字詰めのある方に拘らず本文の脱落が生じやすいであろうし、先述通り現に876行の事例と同じ脱落がすでに日現本に見られるのもあって、飽くまで一つの可能性に過ぎないのだが。

なお、嵯峨本『方丈記』は、最近に国文学研究資料館影印叢書の一冊(註)に加えられたが、それに付された「解説」(小秋元段氏)が、「近世初頭、古活字版として刊行される本は、刊行に値するだけの需要のある作品が多くを占めた。この時期の『方丈記』の関心の度合いは、どの程度だったのであろうか。例えば、細川幽斎は慶長三年(一五九八)以前と同十年に『方丈記』の書写を行っていることが知られている。……これらことから、素庵をはじめ、同時代の知識人たちは、『方丈記』に相当の価値を見いだしていたことが容易に想像できるのである」と指摘する。一つの可能性として右に想像し得た近世愛蔵の拡がりは、そうした近世初頭頃における『方丈記』の評価状況の延長線上に位置付けられる現象でもあるに違いない。

(1) 梶山柚輝のその後の調査によって、野崎広大『茶会漫録』第八集（中外商業新報社、大14）の中の「遊強羅記 方丈庵の茶事」（大正八年九月五日記）も、同じ茶会を話題にし、「彼の東の窓の下なる机に依れば、其上には松花堂が門弟の藤田彩雲が贍写せる、方丈記と鴨長明集の二冊を飾りて古人を偲ばしめ」と記述していることが判明した。

(2) 国文学研究資料館影印叢書7『嵯峨本 方丈記』（勉誠出版、平28）。なお、京都女子大学図書館所蔵「細川友濟」本『方丈記』が、現在、慶長三年幽齋校合本の全貌を窺い知ることのできる唯一の伝本であること、中前・久田麻未「京都女子大学図書館所蔵「細川友濟」本『方丈記』——慶長三年幽齋校合本の転写本——」（『国文論藻』17、平30）にて述べた。

《付記》「于時元亨」——「元亨」「文龜二年」本奥書写本補足覚書

前出『東山中世文学論纂』所載略目録稿において、江戸中期頃の京都女子大学図書館所蔵「元亨」「文龜二年」本奥書写本を取り上げた際、それに見られる本奥書「于時元亨」について、「あまりに不完全である。そのあとに続く書写した旨の記事などが、文龜二年の書写時点あるいは江戸中期の書写時点などに欠損して書写されなかった、というような状況が想像されるところであろう」「本来のものではなくて何らかの形で紛れ込んだものであるとか（「于時元亨」と誤って書き始め、誤りに気付いて書きさした、それが抹消されずに残った、例えばそんなことも考えられようか……）」と述べた。しかし、近時、中村善則・問屋真一「石峯寺如法大般若経について」（『神戸市立博物館研究紀要』第十一号、平6）が載せる、鎌倉末期の書写経を中心とする播州石峯寺所蔵『大般若経』六百卷の「奥書一覽」の中に、卷第三百八の奥書「一交了／于時元亨」が示されているのを、偶然目にした。「于時元亨」という奥書は、「不完全」というわけでは必ずしもなく、「本来のもの」であったのかもしれない。

【翻刻】〔基本的に通行字体に改め、私に句読点等を施した。また、行番号を五行ごとに行頭に付し、行末を「」で示した。〕

行川のなかれはたえず／して、しかも、との水に／あらず。よとみにうかふ／うたかたは、かつ消かつ／5むすひて、久しくとまる／事なし。世中に／有人と住家と又かく／のこし。玉敷の宮古／のうちに、むねをならへ／10いらかをあらそへる、たかき／いやしき人のすまる／は、代々をへてつきせぬ／ものなれと、是をまこと／かたつぬれば、むかし／15有し家はまれ也。あるは／大家ほろひて小家と／なる。住人も是に同じ。／所もかはらすひともおほ／かれと、いにしへみし人は／20二、三十人中にわつか／ひとりふたりなり。／あしたに死し夕に／生るゝるならひ、たゝ水の／泡に似たりける。しらす、／25生れ、しぬる人、いつかたより／来て、いつ方へか去。／又しらす、かりのやとり／たれか為に心をなや／まし、なに、よりてか／30めをよるこはしむる。／そのあるしと住家と、／無常をあらそひ／去様、いは、あさかほの／露にことならず。／35あるは露落てはな／残れり。のこるといへとも／朝日にかれぬ。あるは／はなしほみて露猶／きえず。消すといへとも／40夕をまつことなし。／凡物の心をしれりし／より、四十あまり／のはる秋を送る間に、／世の不思議を見る事、／45や、たひく／に也ぬ。／去安元三年四月廿八日／かよ、風はけしく／吹てしつかならさりし／夜、いぬの時はかり、都の／50たつみより火出来て／いぬるに至る。はては／朱雀門・大極殿・大学／寮・民部省まで移り／て、一夜か程に灰と也^ニき。／55火本は樋口富小路と／かや、病人をやとせる／かり屋より出来けると／なん。吹まよふ風に／とかくうつりゆく程に、／60あふきをひろけたる／ことく末広になりぬ。／遠家は煙にむせひ、／ちかきあたりはひたすら／ほのほを地に吹つけたり。／65空には灰を吹たてた／れば、火の光に映して、／あまねく紅なる中に、／風に堪す吹きられたる／炎、とふかことくにして、／70三町をこえつゝ、移り／ゆく。其中の人、うつゝ、／ころならんや、或は／煙にむせひてたふれ／ふし、あるは炎に／75まくれてたちまちに／死ぬ。あるはまたわつかに／身ひとつからくして／のかれたれとも、資財／をとり出るに及はず、／80七珍万宝さながら／灰燼となりにき。その／つるへいくそはくそ。／此度公卿の家十六／焼たり。まして其外は／85かすしらす。すへて／みやこのうち三分か／一に及へり

とぞ。／男女死ぬるもの数千人、／馬・牛のたくひは／90辺際をしらす。／人のいとなみみな／をろかなる中に、／さしもあやうき／京中の家を作る／95とて、宝を費し、／心をなやますことは、／すくれてあちき／なくそ侍るへき。／又、治承四年卯月廿九日／100の比、中御門京極の／程より大なる辻風／おこりて、六条わたり／まていかめしくふき／ける事侍りき。／105三、四町をかけて吹／まぐる間に、其中に／こもれる家共、大なるも／ちいさきも、一として／やふれさるはなし。／110さなからひらに／たふれたるもあり。／けた・はしらはかり／残れるも有。また、門の／うへを吹はなちて／115四・五町か程にをき、／又、垣をふきはらひて／隣とひとつになせり。／いはんや家のうちの／たから数を尽し／120て空にあかり、檜皮・／ふき板のたくひ、冬／の木葉の風に／みたる、かことし。／塵を煙のこたく／125ふきたてたれば、／すへて目も見えず、／おひた、しくなり／とよむ音に、もの／いふこゑもきこえず。／130地獄の業風なりとも／かくこそはとそ覚え／ける。家の損亡する／のみならず、是を／とりつくるふ間に、／135身をそこなひ／かたはつけるもの、数／をしらす。此風ひつし／さるの方にうつり／行て、おほくの人の／140歎をなせり。辻風は／つねに吹ものなれと、／かゝることやはある。／た、ことにあらず、／さるへきもの、さとし／145かなとぞ、うたかひ／侍し。又、おなし／年の水無月の／比には都うつり侍りき。／いとおもひの外なりし／150こと也。大かた此京／のはしめをきけは、／嵯峨天皇の御時／都とさたまりにける／より、既に数百歳／155をへたり。ことなくて／たやすくあらた／まるへくもあらねは、／これを世の人たや／すからす愁あへる／160様、ことほりにも過たり。／されとも、かくいふ／甲斐なくて、御門／より初奉りて、／大臣・公卿こと／く／165移り給ひ、世に／仕ふるほとの人、たれか／ひとり故郷に残らん。／官位に思ひをかけ、／主君のかけをたのむ／170ほとの人、一日もとく／移らんとはけみ／あへり。時をうしなひ／世にあまされて、／期する所なき／175ものは、愁なから／とまりをり。軒を／あそひし人の住／居、日を経つ、荒行、／家はこほたれて／180淀川にうかひ、地は／目前に島となる。／人の心みなあへた／まりて、馬・鞍を／のみおもくす。牛・車／185を用とする人なし。／西南海の所領を願、／東北国の庄園をは／このます、其時、をの／つかからことのとより／190ありて、摂津国今

/の京に至れり。所の有様を見るに、/其地、程せはくて、條/里をわるにたらず、/195北は山にそひてたかく、/南は海に
 ちかくて/下れり。なみの音/常にかまひすし/くて、塩風ことに/200はけしく、内裏は/山の中なれば、かの/木丸殿もかく
 やと、/中く/やうかはりて/優なる方も侍りき。/205日々にこほちて、川も/せきあへす、はこひ/くたす家、いつくに/つ
 くれるにかあらん。/猶空しき地はおほく、/210造る屋はすくなし。/古郷は既にあって、/新都はいまたならず。/ありとし
 有人、/みな浮雲のおもひ/215をなせり。本より/此所にをるものは、/地をうしなひて愁へ、/今移り住人は、土木/の煩あ
 ることを歎く。/220道の辺を見れば、/車にのるへきは馬に/のり、衣冠・布衣なる/へきは直垂をきたり。/都の條里たちま
 ち/225にあらたまりて、/た、ひなひたる武士/にことならず。/これは世のみだる、/瑞相かと聞ける/230もしるく、日を
 経つ、/世の中うき立て、/人のこ、ろもおさまらず。/民の愁つみに空し/からさりければ、同年/235の冬、なを此京に/か
 へり給ひにき。/されと、こほちわた/せりし家とも/いかになりけるか、こと/240く/くもとの様にも/つくらす。ほのかに
 /伝聞に、いにしへ/のかしこき御代には、/憐をもて国を治め、/245則御殿にかやを/ふきて軒をたも/と、のへす、煙のと
 もし/きを見玉ふ時は、/かきりあるみつき物/250をさへゆるされき。/これ、民をめぐみ/世をたすけ玉ふ/によりて也。今
 の/世中の有様、昔に/255なすらへて知ぬへし。/又、養和の比かとよ、/久しくなりてたし/かにも覚えす、二とせ/か間飢
 渴して、あさ/260ましき事侍りき。/あるひは春・夏日り、/あるひは秋冬、大風・大水などよからぬ/こと、も打つ、き、
 /265五穀ことくくみのら/す。空しく春耕、/夏うふるいとなみ/のみ有て、秋刈、/冬おさむるそめきは/270なし。是によ
 つて、/国々の民、あるひは/地を捨て墾を出、/あるひは家を忘れて/山に住。様々御祈/275はしまり、なへて/ならぬ法と
 もおこな/はるれとも、更に/そのしるしなし。/京のならひ、もとは/280田舎をこそたのめる/に、たえてのほる/ものなけ
 れは、さのみ/やはみさほもつくり/あへん。念しわひ/285つ、宝物かたはし/より捨ることく/すれとも、更に目/見たつる
 人なし。/たまく/かふるものは、/290金を軽くし粟を/重くす。乞食道のへに/おほく、愁悲しむ声、/耳にみてり。先の/

とし、かくのごとく／295からくして暮ぬ。明る／としはたちなをる／へきかと思ふに、あま／さへゑやみうちそひて、／まさるやうに跡かた／300なし。世の人みな、／飢死にければ、目を／経つ、きはまりゆく／さま、少水の魚の／たとへに叶へり。／305はてには、笠をうち／き、あしひきつ、み、／よろしき姿し／たるもの、ひたすら／家ことに乞ありく。／310かくわひしれたるもの／とも、ありくかとみれば、／則たふれ死ぬ。ついち／のつら、路頭に／飢しぬるたくひは、／315数しらす。とり捨る／わさもなければ、くさき／香、世界にみち／て、かはりゆく／かたち有ま、目も／320あてられぬ事／おほかり。いはんや／川原などには、馬・車／の行ちかふ道たに／もなし。あやしき／325賤山かつも力つきて、／薪にさへともしく／なりゆけは、たのむ／かたなき人は、みつから／家をこほちて、市に／330出て売に、一人が持／出ぬるあたひ、猶一日か／命をさ、ふるにたに／をよはずとぞ。あや／しきことは、かゝる／335薪の中に、丹つき、／白かねこかねのはく／所々につき見ゆる／木のわれ、あひましれり。／これをたつぬれば、／340すへき方なきもの、／古寺に至りて仏／をぬすみ、堂の物／の具をやふり取て、／わりくたける也けり。／345濁悪の世にしも生れ／あひて、かゝる心うき／わさをなん見侍りき。／又、あはれなること侍き。／さりかたき女男など／350持たるものは、其心さし／まさりてふかきは／かならず死す。そのゆへは、／我身をは次にして、／男にもあれ女にもあれ、／355いたはしくおもふかたに、／たま／乞得たる物／を先ゆつるによりて／なり。されは、父子／あるものは、定まれる／360事にて、おやそ先／たちて死にける。／父母か命つきてふせる／をしらすして、いとけ／なき子の、その乳房に／365すいつきつ、ふせる／なとも有けり。仁和寺／に隆暁法印と／いふ人、かくしつ、／かすしらすしぬる／370ことを悲しみて、／聖をあまたかたらひ／つ、其死首の見ゆる／ことに阿字を書て、／縁をむすはしむる／375わさをなんせられける。／其数をしらんとて、／四五両月かほとかそへ／たりければ、京の中、／一条より南、九条より／380北、京極より西、朱雀より／東、道のほとりにある／頭、すへて四万二千三百／余なん有ける。いはんや／其前後にしぬる／385ものもおほく、河原・／白川・西の京、もろ／の／辺地などをくはへて／いは、際限もあるへからず。／いかにいはんや諸国／390七道をや。近くは／崇徳院の御位

/の時、長承の比かとよ、/か、るためしは有ける/ときけと、其よの有/395さまはしらす。/まのあたりいとめつらか/にかなしかりし/事也。又、元暦二年/の比、大なるふること/400侍りき。其様つねなら/す。山くつれて川を/うつみ、海かたふきて/陸をひたせり。つち/さけて水わきあかり、/405いはほわれて谷に/まるひ入、渚こく/舟は波にた、よひ、/道ゆく駒はあしの/たちとをまとはせり。/410況都のほとりには、/在々所々、堂舎塔/廟一として全からず、/あるひはくつれ、あるひは/たふれたる間、塵灰/415たち上りて、さかり/なるけふりのことし。/地のふるひ家のやふる、/をと、いかつちのこと/ならず。家のうちに/420をれば、忽にうち/ひしげなんとす。/はしり出れば、又/地われさく。羽なければ/空へもあかるへからず、/425龍ならねは雲にも/のほらんこと難し。/をそれの中に恐る/へかりけるは、た、/地震也けりとそ/430覚侍りし。

其中に、/ある武士のひとり子/の、六、七はかりに侍りし/か、ついちのおほひの/下に小家を作り/435て、はかなげなる/跡なしことをして/あそひ侍りしか、俄に/くつれうめられて、/あとかたなくひらに/440うちひさかれて、二の/目なと一寸はかり/うち出されたるを、父/母か、へて、声もおし/ますかなしみあひて/445侍りしこそ、あはれに/悲しく見侍りしか。

/子のかなしみには、/たけきものはちを/わすれけりと覚えて/450いとをしく理かなとそ/見侍りし。かくおひ/た、しくふることは、/しはしにてやみにしか、/その名残しはしは/455絶す。よの常に/おとろくほどの地震、/二、三十度ふらぬ日は/なし。十日・廿日過/にしかは、やうく/間/460遠になりて、あるひは/四、五度、二、三度、もしは/日ませ、一、二、三日に一度/など、大かた其名残/三月はかりや侍けん。/465四大種の中に、水・火・/風は常に害を/なせと、大地に至りては/ことなる変をな/さす。昔、斉衡の/470比かとよ、大地震ふ/りて、東大寺の/仏のみくしおち/なとして、いみしき/事とも侍りけれど、/475なをこのたひには/しかすとそ。則、人/みな、あちきなき/ことを述て、いさ、か/心のにこりもうす/480らくかとみし/程に、月日かさなり、/年越しかは、後には、/言の葉にかけて/いひ出る人たになし。/485すへて世のあり/にくき事、我身と/栖とはかなくあた/なる様、かくのことし。/いはんや、所により/490身のほとに随ひ/て、心をなやます/

こと、あけてかそふへからず。もし、をのつから身かなはずして、495権門のかたはらにゐるものは、よろこぶ事はあれども、大にたのしふにあたはず。歎ある500時も、声をあけて泣ことなし。進退やすからず、立居につけて、恐れをのく。たとへは、雀の鷹505の巢にちかつけるかことし。もし、まつしくて、富る家の隣にをるものは、朝夕にすほき510姿をはちてへつらひつゝ、出入。妻子僮僕のうらやめるさまをみるにも、富る家の人の、なひ515かしろなるけしきを聞にも、心念々にうこきて、時としてやすからず。もし、せはき地にをれば、520近く炎上するとき、其害をのかる、事なし。もし辺地にあれば、往反つらひおほく、盜賊の難はな525れかたし。いきほひ有者は貪欲ふかく、ひとり身なるものは人にかるしめらる。宝あれば歎切也。530人をたのめは、身、他のやつことなり、人をはこくめは、心、恩愛につかはる。世にしたかへは535くるし。又、したかはねは狂へるに似たり。いつれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しはしもこの身をやとし、540玉ゆらも心をなくさむへき。わか身父方の祖母の家をつたへて、久しく彼所にすむ。その545後、縁かけ身おとろへて、しのふかたしけかりしかは、つゝに跡とむることを得ずして、三十550余にして、更に我心とひとつの庵を結ふ。是を有し住るになすらふる十分か一なり。た、555居屋計をかまへて、はかしくは屋を作るにおよはず。わつかについひちをつけりと560いへとも、門たつるにたつきなし。竹を柱として、車やとりとせり。雪ふり風吹ことにあやうから565すしもあらず。所は河原ちかければ、水の難ふかく、しらなみのおそれもさはかし。すへて570あらぬよを念し過しつゝ、心をなやませることは、三十余年なり。其間折くのたかひめに、575をのつからみしかき運をさとりぬ。則、五十の春をむかへて、家を出、世をそむけり。もとより580妻子なければ、捨かたきよすかもなし。身に官祿あらず。何につけてか執をと、めん。空しく585大原山の雲にいくそはくの春秋をかへぬる。爰に六十の露消かたにをよひて、更に590末葉のやとりをむすへることあり。いは、狩人の一夜の舎りを作り、老たるかい子の眉をいとむ595かことし。是を中比の住家になすらふれば、百分か一にた

にも及はず。とかく／いふほとに、齡はとし／くに／600かたふき、すみ家は／折々にせはし。其／家の有様、よの常／ならず。ひろさは／わつかに方丈、たかさは／605七尺かうち也。所を思ひ／さためさるかゆへに、／地をしめて作らず。／土居をくみ、打おほひ／をふきて、つきめ／610ことにかかけかねをかけ／たり。もし心に／かなはぬことあらは、／やすく外にうつさん／かため也。其改造る／615時、いくはくの煩か有。／つむ所、わつかに二両也。／車の力をむくふる／外は、更に用途いらす。／今、日野山の奥に／620跡をかくして、／南にかりの日かくし／をさし出して、／竹のすのこをしき、／其西に閼伽棚を／625作り、うちには西の／垣にそへて、あみた／画像を安置し／奉りて、落日を／請て眉間の光とす。／630彼帳のとひらに、／普賢ならひに／不動の像をかけ／たり。障子の上に／ちいさきたなを／635かまへて、黒き皮籠／三、四合を置。則、／和歌・管弦・往生／要集こときの抄物／を入たり。傍に箏・／640琵琶、をの／一／張を／たつ。いはゆるおりこと・／つき琵琶これ也。／東にそへてわらひ／のほとろをしき、／645つかなみをしきて／夜の床とす。東の／垣に窓をあけて、／こゝにふつくゑを／つくり出せり。まくら／650のかたにすひつ／あり。これを、柴折／くふるよすかとす。／庵の北に少地をしめ、／あはらなるひめ垣を／655かこひて、園とす。／則、もろ／くの薬草／を栽たり。かりの／庵の有さま、かくの／ことし。其所の様／660をいは、／南にかけひ／あり。岩をた、みて、／水をためたり。／はやし軒近ければ、／爪木を拾ふにともし／665からす。名を外山と／いふ。正木のかつら跡／をうつめり。谷しけ、／れと、西は晴たり。／観念のたよりなき／670にしもあらず。春は／藤なみを見る。紫／雲のことくして、／西の方に匂ふ。夏は／ほと、きすをきく、／675かたらふことに四手／の山路を契る。秋は／日くらしのこゑ耳／にみてり。空蟬／の世をかなしむと／680聞ゆ。冬は雪をあ／はれむ。積り消る／さま、罪障にたとへ／つへし。念仏もの／うく、読経まめ／685ならざる時は、みつから／やすみ、みつから／をこたるに、さま／たくる人もなく、／また、恥へき友も／690なし。殊更に無言／をせされとも、ひとり／をれば口業をお／さめつへし。かならず／禁戒を守るとしも／695なけれ共、境界な／ければ、何につけてか／やふらん。若、跡の／しらなみに身を／よする朝には、／700満沙弥か風情を／ぬすみ、もし、桂の風、／はちを

ならず夕には、／潯陽の江をおもひ／やりて、源都督の／705なかれをならふ。／もし、あまり興あ／れば、しは／松の／ひ、
 き秋風の葉を／たくへ、水の音に／710流泉の曲をあやつる。／芸は是、つたな／ければ、人の耳を／悦はしめんとにも／あらず。
 ひとりしらへ、／715ひとり詠して、みつから／心をやしなふ計也。／又、麓に一の柴の／庵あり。則、此山守か／ゐる所也。か
 しこに／720小童有、時／来り／て相訪ふ。もしつれ／なる時は、これを友と／して、あそひありく。／かれは十六歳、わ
 れは／725六十、其齡ことのほか／なれと、心をなくさむる／事は、これ同し。／あるひは、つはなを／ぬき、いはなしをとる。
 ／730又、ぬかこをもち、芹を／つむ。あるひは、すそは／の田井に至りて、／落穂をひろひて／ほくみをつくる。もし、／735日
 うら、かなれば、／嶺によち上りて、／はるかにふるさとの／空を望み、木幡山・／伏見の里・鳥羽・羽束師／740を見る。勝地
 はぬし／なければ、心をなくさむる／さはりなし。あゆみ／わつらひなく、心さし／とをくいたる時は、／745是より峯つ、き、
 ／すみ山を越、笠取／を過て、岩間に／まうて、石山を拝む。／若は又、粟津の原を／750分て、蟬丸翁が跡を／とふらひ、田上
 川を／わたりて、猿丸大夫か／墓をたつぬ。帰る／さには、折につけ／755つ、桜をかり、／紅葉をもとめ、わらひ／を折、木の
 みをひろひ／て、且は家つとに／す、もし夜しつかな／760れば、窓の月に／古人を忍ひ、猿の／こゑに袖をうるほす。／草むら
 の蛸は、とをく／真木の嶋のか、り／765ひにまかひ、暁の／雨は、をのつから／木の葉吹あらしに／似たり。やま鳥の／ほろ／
 くとなくを／770聞て、父か母かと／うたかひ、峯のか／せきの近くなれ／たるにつけても、／世に遠さかる程を／775しる。ある
 ひは埋火を／かきをこして、老の／ね覚の友とす。おそ／ろしきやまならねと、／ふくろうのこゑをあ／780はれむにつけても、
 ／山中の景氣、折に／つけてもつくること／なし。いはんや／ふかく思ひ、ふかくしれ／785覽人のためには、／これにしも限る
 へ／からず。大かた此所に／住初し時は、白地と／おもひしかと、今迄に／790五とせを経たり。かり／の庵もや、ふるや／とな
 りて、軒にはくち／葉ふかく、土居苔む／せり。をのつからことの／795便にみやこをきけは、／此山に籠りゐて／後、やんこと
 なき人の／かくれ玉へるもあまた／聞ゆ。まして、その／800かすならぬたくひ、／尽して是をしる／へからず。たひ／の／炎

上にほろひたる／家、又いくそはくそ。／805た、かりの庵のみ、／のとけくして恐れ／なし。程せはしと／いへとも、夜ふす床
 ／有、昼をる座あり。／810一身のやとすにふそく／なし。かうなはちい／さき貝をこのむ。／これ、よく身をしる／によりて也。
 みさこは／815あら磯にゐる。人をおそ／る、によりて也。我／また、かくのことし。／身をしり世をしれらは、／ねかはす、ま
 しらはす。／820た、しつかなるを／望とし、愁なき／をたのしみとす。／すへて世の人の／住家を作るならひ、／825かならずし
 も身／の為にはせず。或は／妻子・眷属の為に／つくり、或は親昵・朋／友に作る。あるひは／830主君・師匠、及財宝・／馬牛
 のためにさへ／これをつくる。我今、身／のためにむすへり。／人の為につくらす。／835故いかんとなれば、／今の世のならひ、
 此身／もなく、たのむへ／きやつこもなし。／たとひひろくつ／840くれりとも、誰をか／やとし、たれをかすへん。それ、人
 の友たる／ものは、とめるを／たうとみ、ねんころ／845なるを先とす。かならず／しも情あると直／なるとは愛せず、／た、糸竹・
 花月／を友とせんにはしかす。／850人の奴たるものは、賞／罰のはなはたしき／をかへりみ、恩の厚を／おもくす。更にはこく
 み／あはれふといへとも、やすく／855しつかなるをはねかはす、／た、わかみをやつこ／とするにはしかす。／もしすへき事
 あれば、則をのつから／860身をつかふ。たゆからす／しもあらず。人を／したかへ、人をかへりみる／よりはやすし。／若あり
 くへき事／865あれば、みつからあゆむ。／くるしといへとも、／馬・鞍・牛・車と心を／なやますには似す。／今、一身を分ち
 て／870二の用をなす。手の／やつこ、足ののりもの、／よくわか心になかへり。／こ、ろ又身のくるしみ／をしれらは、くるし
 む／875時はやすめつ。まめ／なる時はつかふ。つかふ／とても心をうこかす／事なし。いかに況や、／常にありき、つねに／880
 うこくは、養生なる／へし。なんそいたつらに／やすみをらん。人を／くるしめ、人をなやますは、／又罪業なり。いか、他
 885のちからをかるへき。／衣食のたくひ、また／おなし。藤の衣・あさ／のふすま、うるにした／かひはたへをかくし、／890野
 辺のつはな・峯／のこのみ、命をつく／はかり也。人にまし／はらされは、姿を／恥る悔もなし。かて／895ともしければ、をろ
 ／そかなれとも、なを／味をあまくす。すへて／かやうの事、たの／しく、富る人に／900対していふには／あらず。た、我身／

一にとりて、むかしと／いまとをたくらふる也。／大かた世をのかれ／905身を捨しより、／うらみもなく、お／それもなし。命
 は／天運にまかせて、／をします、いとはず。／910身をは浮雲に／なすらへて、たのます、／またしとせず。一期の／たのしひは、
 うた、ね／の枕の上にはまはり、／915生涯の望は、折々の／美景に残れり。それ／三界はた、心一也。／心若安すからは、
 牛馬・七珍もよし／920なく、宮殿望なし。／いま、さひしき住／居・一間の庵、みつから／是を愛す。をのつから／都にいて、
 は乞食と／925なれることをはつと／いへとも、かへりて爰に／をる時は、他の俗塵／に著する事をあ／はれふ。もし人、この／
 930いへることをうたかは、／魚鳥の分野をみよ。／魚は水にあかす、／うをにあらされは、／其心をしらす。鳥は／935はやし
 をねかふ。／鳥にあらされは、其／心を知らず。閑居の／気味もまたかくの／ことし。住すして／940たれかさどさん。抑／一期
 の月影かたふき／て、余算の山の端に／ちかし。忽に三途／のやみにむかはん時、／945なにのわさをかかこ／たんとする。仏の
 人／を教給ふおこりは、／事にふれて執心／なかれと也。今、草／950の庵を愛するも／科とす。閑寂に／着するも障なる／へし。
 いか、用なき／たのしみをのへて、／955空しくあたら時／を過さん。しつかなる／あかつき、此ことほり／を思ひつ、けて、
 みつから心にとひて／960いはく。世をのかれ／て、山林にましまる／は、心をおさめて道／をおこなはんため也。／しかるを、
 汝か姿は聖に／965似て、心はにこりに／しめり。住家はすなはち／浄名居士の跡をけか／せりといへとも、たも／つ所は、わつ
 かに周梨／970弊特か行にたに／も及はず。若これ／貧賤のむくひの／みつからなやますか、／将又妄心のいたりて、／975くるは
 せるか、其時、心／更に答ふることなし。／た、傍に舌根を／やとひて、不請の／念仏両三反を申て／980やみぬ。時に、建曆の
 ／二とせ、弥生の晦日／比、桑門蓮院^{マヤ} 外山／の庵にして、これを／しらす。／985月かけは人やまのほも／つらかりき／たえぬ
 光をみる／よしもかな／